

# 「義烈空挺隊」への 父（奥本実）の思い

陸士54家族会員

奥本 康大

「神風特攻隊」と言えば、日本人なら大概の人が知っているが、残念ながら「義烈空挺隊」の存在を知る人は殆どいない。

自分が「義烈空挺隊」を初めて知ったのは、今から約60年前の小学校4年生の夏に遡る。

この年の夏休みに、父に連れられ和歌山県高野山での陸軍落下傘部隊の慰霊祭に参列したのである。高野山には昭和31年に落下傘将兵の墓が建立され、毎年慰霊祭が催されていた。この年からは、自衛隊殉職者も合祀することになった節目の年だったと記憶している。

父はこの年の慰霊祭で祭典委員長をしたようで、「祭文」の下書き等が、多くの手記と共に我が家に遺っている。

父は生前、戦時中のことを殆ど語らなかつた。母や親戚の人から、父は落下傘部隊について、戦時中に天皇陛下に単独拝謁を賜わったぐらいの話を開いた程度で、それがどんなに凄いことも理解出来なかつた。

子供の頃の父の印象は、頻繁に各地

の慰霊祭に出掛けるのが仕事のような人間であった。

昭和36年の慰霊祭には、「空の神兵」と呼ばれた落下傘部隊にバレンバン奇襲攻撃を命じた菅原道大元中将（元第3飛行集団長）が、来賓として参列されたのである。菅原元中将は、前日我が家に宿泊され、自分も父たちと一緒に高野山に向かったので、その時の様子は今でも鮮明に憶えている。

写真…来賓挨拶をされる菅原道大元中将



慰霊祭の来賓挨拶で、菅原元中将が「奥山、諏訪部の両君」と語りかけられた時の光景が、今でも自分の脳裏に焼き付いている。またお二人の名前が英霊であることは子供でも理解できたが、当時は小学生であり「義烈空挺隊」が何たるか、また奥山、諏訪部のお二人がどのように散華されたのかを詳しく知ろうともせず長い年月が過ぎた。

恥ずかしい限りであるが、父の遺し

た手記から知ったのは4年ほど前である。奥山大尉、諏訪部大尉を調べると父との繋がりがあまりにも深く、自分が父の遺志を継いで慰霊と顕彰をしなければと感ずるようになった。これは8年前に旅立った父からの遺言だったのかもしれない。もしかしたら、今では語られることのない義烈空挺隊の英霊が嘆き悲しみ、縁者でもある自分を頼ってこられたとも思えるのである。

次の「義烈飛行隊長 諏訪部忠一中佐を憶う」は、父が陸士同期生（54期）を偲んで「偕行」に寄稿したものです。